

当院における妊孕性温存実施数および温存後 ART 妊娠 12 症例の周産期予後調査結果

藤岡聡子

IVF 大阪クリニック

当院では 2006 年より妊孕性温存治療を開始し 2025 年 9 月までに胚凍結相談目的で 80 名、卵子凍結相談目的で 91 名が来院し、その中で採卵に至ったのはそれぞれ 63 名、65 名であった。実際に胚凍結が完了した症例は 60 名、卵子凍結完了症例は 66 名（胚凍結予定も卵子凍結に変更 1 名を含む）であった。これまでに温存後生殖補助医療（ART）を実施した症例は 19 名（凍結胚使用：16 名 33 周期、凍結卵子使用：3 名 4 周期）であった。その内 12 名（凍結胚使用症例 10 名 12 周期、凍結卵子使用症例 2 名 2 周期）が出産に至ったので、本 12 症例について周産期予後：在胎週数、出生児体重、分娩様式、周産期合併症についても報告する。

12 名の原疾患内訳は乳がん 8 名、白血病 2 名、骨腫瘍 1 名、ホジキンリンパ腫 1 名であった。分娩週数は妊娠 35 週 1 日から 40 週 6 日、早産例は 2 名 2 周期であった。出生児体重は 1989 g から 3698g、分娩様式は帝王切開が 7 名（既往帝王切開 2 名含む）、経膈分娩が 4 名、不明 1 名であった。周産期合併症は HDP が 3 名 3 周期、常位胎盤早期剥離 1 名 1 周期であった。ちなみに、凍結胚移植はホルモン補充凍結融解胚移植 3 周期、自然排卵凍結融解胚移植 1 周期であった。

女性のがんサバイバーの妊娠では周産期の HDP、心不全リスク、早産とそれに伴う児の低出生体重、癒着胎盤などとの関連が示唆されている。今回の検討でも HDP 発症率が 25% (3/12) であった。当院では、現時点で凍結卵子の使用率 4.5% (3/66) と低いが、今後は卵子を融解し胚移植を行う症例も増加することが予想される。がん種も様々であり、がんに対する治療内容も多岐にわたり温存後の ART 妊娠においても個別対応が求められる。卵子・胚凍結後も将来的に安全な妊娠・出産を叶えるため、生殖医療側とがん治療施設が連携し適切なプレコンセプションケアを含めた長期的なフォローアップを行っていくことが重要である。